

堆積量 $5\text{mg}/\text{cm}^2$ ($0.05\text{kg}/\text{m}^2$) 以上の範囲は轟川河口に限られており、最大で約 $50\text{mg}/\text{cm}^2$ (約 $0.5\text{kg}/\text{m}^2$) であり、堆積厚は最大で 0.4mm であると予測される。また、南側仮設調整池が稼働する2年間に堆積し続けた場合には最大で 1.6mm 程度であると予測される。

現況における底質中懸濁物質含量 (SPSS) と予測結果を比較すると、轟川河口前面海域の底質中懸濁物質含量 $13\sim 92\text{kg}/\text{m}^3$ に対し、機械処理設備が180日間連続稼働した場合の堆積量の最大値は約 $0.5\text{kg}/\text{m}^2$ であり、単位体積当たりの堆積重量が変わらないとした場合、底質中懸濁物質含量の $0.5\sim 4\%$ 程度に相当する。

図-6.5.1.2(13) 3-3 濃度分布 (平均値、平常時、小規模、第1層、平均水深 ~ 1.0 層)	図-6.5.1.2(14) 平常時における濃度 (5.5) の水質測定結果 (参考)
--	--

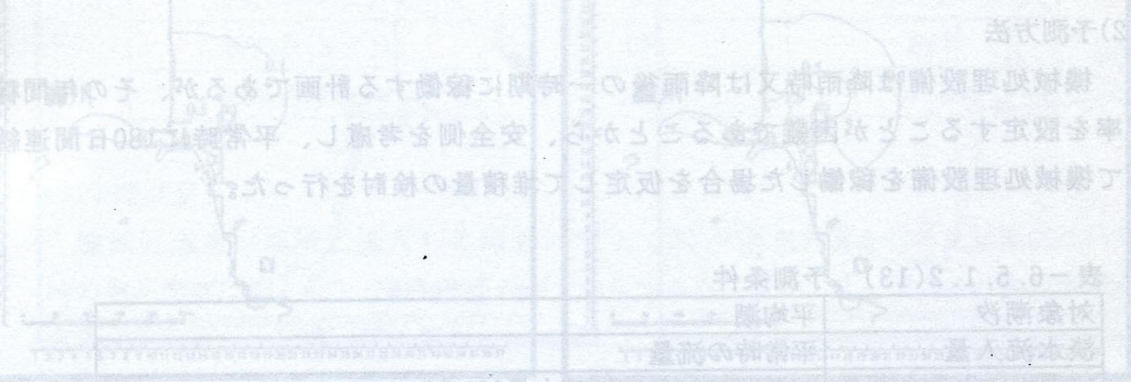


図-6.5.1.2(13) 3-3 濃度分布 (平均値、平常時、小規模、第1層、平均水深 ~ 1.0 層)

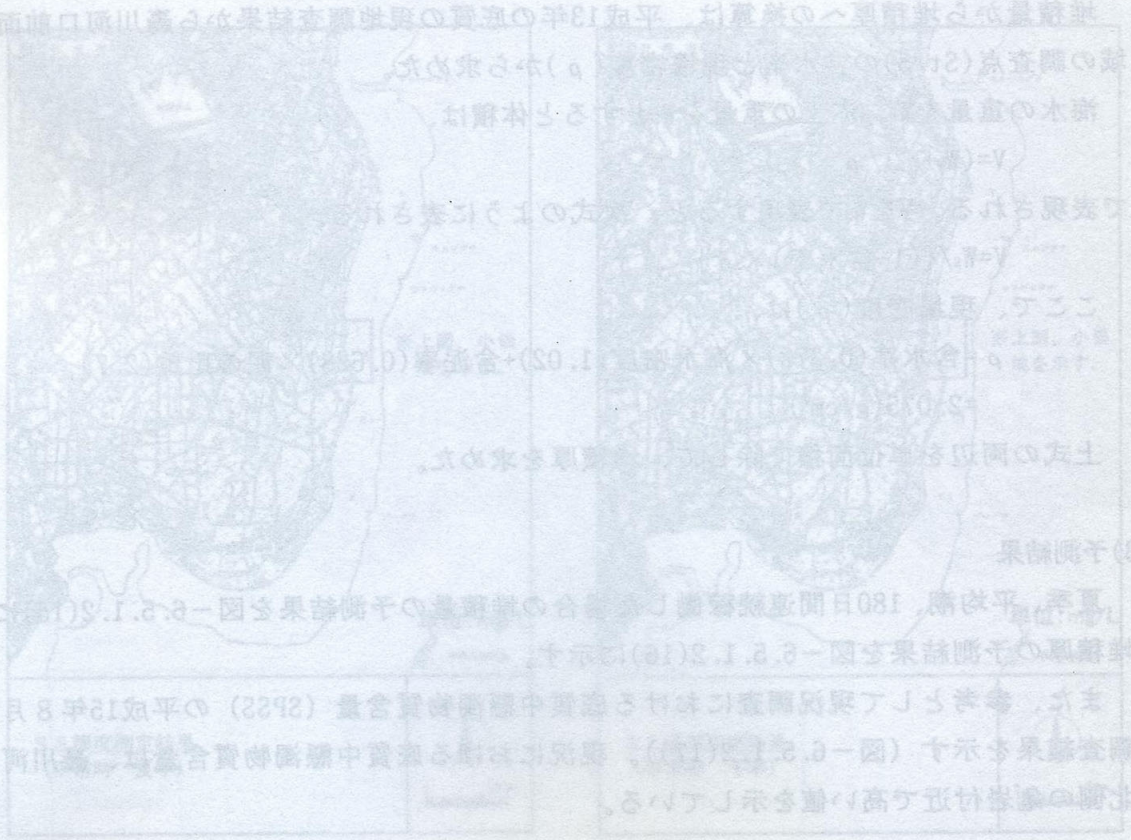


図-6.5.1.2(14) 平常時における濃度 (5.5) の水質測定結果 (参考)